

## ●1989

前年の秋口あたりから、現場作業だとか倉庫内作業だとかを紹介してくれる会社に登録し、収入は安定しはじめていた。正月はもちろん実家に帰るはずもなく、5日から仕事を始めることになっていたのだが、私はその日仕事をばっくれ、後樂園の場外馬券売り場で一日を過ごす。当時は、とにかく競馬に狂っていて、収入は確かに安定してきていたのに、そのほとんどは紙屑に化けていた。

登録していた会社は有り体にいえば人夫売りだから、一回や二回ばっくれたところで、仕事をもらえなくなることもなかったんだけど、顔見知りになっていた事務所の人間に文句言われるのが嫌で、それからしばらく他の人夫売りの会社で働き始めることになる。宅配便で有名な、今でも作業着着たバイトが4、5人で電車に乗ってるのをよく見かける、あの会社。そこは重労働じゃなかったけど金が安くて、収入が減ったにも関わらず、週末になると必ず競馬に出かけたりしていたため、再び困窮生活に陥ってしまう。馬券は当たらない。まったく表われる様子のない現世利益であったが、オウムについては露も疑わず、どうも功德が足りないようだと考えた。麻原の説法で「苦しいときの布施は功德が大きい」とかいうのがあって、それにすぎた私は、このころから道場の祭壇の前にある賽銭箱（賽銭箱とは呼んでなかったと思うが）に薄い財布のなかから千円、二千円と、布施するようになっていた。

私は、1986年の9月から96年の10月まで、ほぼぴったり十年の歳月をかけ、ようやく一冊の大学ノートをうめ終えることができた日記のようなものを持っている。10年で大学ノート一冊だから、半年や一年なにも書いていない期間がざらなのだが、これに1989年4月9日の日付で次のようなことが書かれている。

前回書いているときと（注・89年1月21日）今とではまるで精神状態が違っている。

何故か？

真理に目覚めたのである。

こんなことをあらためて書いてしまうような変化のきっかけがなんだったのかははっきり覚えてなく、この日の日記には「その過程についてはここでは書くまい」なんて書いてあって痛恨の極み。ただ、この年の項の頭に書いたような状況からなんとなくではあるが想像できる。自ら招いたことであるとはいえ、この時期、五千円札だけで家賃を払い大家にいぶかしがられたことがあるくらい、貧乏状態だったことは間違いない。世間はバブルを謳歌している。金が欲しい。宗教にすがる。元手もかける。取り返すためにはどうしたらよいか知るために教義の勉強を熱心にする。オウムの世界観をつかむ。元手は返ってくるものとして初めから信じているのだから、その世界観も当然信じる。世界の見方が変わる。

どんな風に変ったのか簡単に言えば、この世の一切、すべての現象というのは苦であり、現世を離れなければ真に幸福にはなれませんよ、という現世否定の世界観を受け入れたということである。麻原がよくくりかえしたフレーズに「人は死ぬ、必ず死ぬ、絶対死ぬ、死は避けられない」というのがあって、どのような幸福も死によってすべて失われてしまうということを説得するためのものだったのだろう。また初期に出版されたオウムにとって中心的な著書のひとつ「イニシエーション」のはじまりには次のようなことが書いてある。

はっきり言ってね、この世が楽だと考える人、そういう人は修行者向きではない。

なぜなら、まだ行きつくところまで行っていないんだよね、そういう人は。苦を感じ  
るようになって修行を始める途中の段階と言ってもいいね。

確かどこかで「苦を感じた者は藁をもつかむ思いで信仰に入る」などとも言っていた覚えがある。ただ、私の場合も（しょーもないとはいえ）それなりの苦を「感じ」て信仰にすぎたところがあるにはあったが、それよりも、この世は苦だ、と「理解」したことのほうが、オウムにはまり込む重要なきっかけになったのだと思う。

それまでは、ただの一人にも宗教に入ってるなんて言うことはなかったのに、この4月9日の記述のおしまいのほうには「ともかく、身近な人間から入信させること」などあることから、徹頭徹尾自分の得、現世的なことしか考えてなかったのが、他人にもこの正しい世界観、真理に気付かせる「べき」だ、というオウムの教えの中にずっぽりとはまった考え方をしている、実際このあとすぐにオウムの雑誌「マハーヤーナ」のバックナンバーを1号から最新号まで買って親のもとに送ったりもした。正月には帰らない、連絡も一切しない（部屋には電話もなかった）。そんなところにいきなりわけのわからない宗教雑誌を送りつける私。

この後、5月1日、3日、4日、8日、14日と、この日記もどきのなかでかなり頻繁といえるくらい記述が続いていて、すべてオウムに関連する事柄である。ところが、これほどのめり込んでいたにもかかわらず、私は呼吸法だとか瞑想だとかを行う修行には参加しなかった。することは以前と同じく、例のバクティと勉強会、説法会への参加、あと変わった点といえば現金の布施が増えたくらいで、他人を入信させるためのアプローチも、家族に本を送った以外は一切しなかった。修行しなきゃいけないと思いつつも、やはり一定時間拘束されるということにうっとうしさを感じたし、他人を導かなきゃと思いつつも、私が宗教者を見る時にしているような奇異な目で見られることを想像すると、そういうことを話す気力もなくなってしまったのであった。

そんな中、5月のことだったと思うのだが、前に登録していた会社から、私向きの仕事があるという電報をもらう。以降再びその会社で働きだすと収入も安定し、少ない持ち金を布施しようと努力していたおかげで競馬の頸木からも解放されていて、小銭がたまるようになっていった。

もともと現世的な欲求から信仰に入っていたせいか、そこそ楽しい生活が送れるようになると、道場への足も遠のきがちになる。かといって、オウムの世界観を捨てるようなことにはならず、それまで積んできた功德を減らさないよう野放図な浪費もしないでいたため、この後、金に困るようなことは全くなくなった。このことはまた、お布施が効いたのだ、というオウムに対する信頼感を深める結果にもなった。

適度な心地よい距離を保ちつつ継続していった信仰は、この年の十月にサンデー毎日によって始められたオウム叩きや坂本弁護士一家失踪の嫌疑をかけられることによっても、なんら影響することはなかった。もちろん、それなりにショックや不安を受けはしたが、それは、世間の目が厳しくなることに対してであって、もともと信仰の話はしないようにしていた口をさらに固くすれば済むことであつたのである。

[1](#)   [2](#)   [3](#)   [4](#)   [5](#)   [6](#)